

L-111

明治四十三年六月三日發

一讀  
千笑  
滑稽頓智笑話

發兌書肆

三重縣桑名

弘報館

264

96







# 簡素人治療法

定價郵税共廿二錢

郵便切手なれば郵税共二十四錢

目錄大要、醫藥なくして病氣を治する法●感冒豫防法●感冒簡易療法●感冒熱除法●婦人月經なき時の療法●子宮諸病治法●子宮病内服薬の製法●子宮病洗滌法●婦人陰部諸病療法●月經不順の豫防及治療法●出産の月日を知る法●男女陰部諸病の療法●男女陰部の疵を治する法●梅毒の根を絶つ法●大便の通じをよくする法●寢小便を治する法●淋病シヨカチ治法●肺病豫防法●肺病治法●虎列刺豫防法●胃病治法●ニキビ治す法●アセボを治する法●さる時能く眠れる薬の製法●毛を生す法●髪を濃くする法●痔治療法●耳だれを治する法●毛を生す法●髪を濃くする法●身の長を延す法●腹痛治法●齒痛治法●痲言肝聲の治法●頭痛を治する法●ヤクトの即治法●サメハダを治する法●口角の臭きを治する法●オコリを治す法●目薬の製法●イボを落す法●ホクロを抜く法●シヤツクリを治する法●胎毒、疥毒を治す法●足労を治する法●其他野菜や果物を薬用にする法●数十件其他諸種の病氣を高價なる醫藥によらず又何時調合した譯の解らぬ賣藥に據らず手軽に自宅に治療出来る様に著述した者であるから各自一部宛手にして置かれたならば不時の病氣に夜分又は醫士に遠く場所に住まれる人に益する事が尠くあるまいと思ふ。

## 發賣元

三重縣桑名矢田嶺

## 弘報館

(振替口座東京 一六九二八番)

# 無器械簡便寫眞インキ

●定價小瓶二十五錢●中瓶四十錢●大瓶七十錢●郵税無料●此インキを塗り原紙を製す●小瓶にて通常寫眞形三百枚●中瓶にて六百枚●大瓶にて千枚を得●塗り方や寫し方の明細書を添付す●本法は新たな**最簡至便**の絶技に發明したる**機械藥**品を要せず常ガラスを塗り原紙を一枚の通れば他に一點の**機械藥**品を要せずも社會萬象凡て原品の儘に速寫し得る殊に他に利益とするは寫眞のみならず**文字**等には原稿の儘何百枚にても**文字**速に寫し得る故名刺ハガキ其他萬般の印刷代用として其便彼の弱版速寫版に勝る、  
其他効用種々、眞に實用と誤樂とを兼ねて便利珍重なり。

## 弘報館

(振替口座東京 一六九二八番)

## 特別廣告

左記の種子類は弊店園藝部に於て採種せる者なれば、發芽確なり、希望者は一袋四錢の割に四袋以上なれば販賣す、然して郵税は弊店にて上納せらるれば六錢以下は御断り申上候、十袋以上は一袋五錢の割にす、清國三尺胡瓜、五寸大豌豆、五尺サゲ、白菜、体菜、小松菜、シシトフ、金出菊、米國紫けし、筑羽根、王不留行、金鶏草、金仙花、サキタリス、フヨ、女櫻、ヒヤブキ、櫻草、カンナ、善光寺、庭石、草花、矢車草、コスモス、白花月見草、黄花月見草、紫花夕顔、春菊、菊花、三色スミレ、黄色スミレ、スターフロック、百日草、千代萩、ガアラテ、オダマキ、紫花アザミ、桔梗、カナンタフト、御香葵、連理草、其の他尙ほ澤山有之候。

●草花は春季、秋季共播種差開へ無之候。  
●品名御指定なき御注文は左の通り割引致候

- 春草花種子 十袋貳拾錢
- 秋草花種子 廿袋參拾錢

## 發賣元

三重縣桑名矢田嶺

## 弘報館

(振替口座東京 一六九二八番)

## 粹な歌あつめ

定價郵税共十錢

さあ、一名此の度賣出しました、評判の粹な歌あつめ、一ツ直ちに合点せられるであろう、今ハ世に情歌一つ、本書を公にしたのである、(うたは恥しむから責められ、歌は出せぬ、(うたは恥しむから責められ、歌は出せぬ、)置かれたら、粹な歌も、是非一冊求めて流し、二上り、三下り、浦里ぶし、丹後の宮津、ぶし、ルエぶし、ヒヤ、節、ヤンレサ、球ぶし、朝辰り、京の金閣寺、ギツチヨ、情歌は皆あるから、歌を覺へるは申迄でもなく、面白き、フシ、歌を覺へるは申迄でもなく、面を讀んで、斯道の天狗となり、友人にはこりて見ては如何で御座る。



は添上郡某村の染物商楠孫三郎方へ五人の賊が忍び込んだ、孫三郎は早くもそれを覺り、賊徒等を驚かし膽玉を轉授させてやろうと思ひ、女房を起して厠に隠れさせ、自分は裸体になつて店の間に隠れ居るとも知らず、奥の間へ踏み込んであたりを見廻しても人は居らない、正しく逃げたる者ならんと話し合い、箆筒より衣類十八點を取りだし、風呂敷に包み、今や持出でんとする時、孫三郎は藍壺の中へ入りて顔から手足全身藍にて染め、生捕りにした河童よろしくと云ふ顔つき

にて眼のみひからせて、奥の間に入り來り、不意に賊供の中へ踏込んだ處、賊は大に驚き、そら出たぞ……喰はれぬ内に早く逃げろ……と狼狽しつゝ、何一點も取り得ず、我先にと逃げて行つた。

#### ●祿高取の功者

徳川家光公鷹を好まれた、旗本の役人又鷹を好む者が多かつた、或る年の正月公鷹狩に出でられた時、鷹匠小野久内と云ふ者、駕に候して雑談の時、何心なく近きはど鷹の功者の旗本に多き事古に稀なりとありければ、公氣色を損じ何とて旗

本に功者あるや大名の中にこそあるべけれどありければ、久内しまつたと思へども今更仕方なく、左なき体に否御供の人々は御前の御使ひ様を拜見仕或は私共咄し候を聞き自然と功者になられ候道理と申上げれば、公氣色直りて左もあらんと氣色を直されたりと。

#### ●草履神社

和泉式部或年下加茂の御社に詣りし折に女子の身の事なりければ、草履にて足を痛め、止むを得ずして紙を捲きつけて置いた、何時しか神主なる忠頼の目に留た

から、忠頼は

千早ふるかみをも足にまくものか、と難じければ和泉式部取敢ず是をぞしもの社とはいふ、と和泉式部は答へたそふだ。

#### ●文覺上人の頓智

遠藤盛遠僧となり文覺と云ふ、曾て罪あり伊豆に謫せらるゝ時、船にて澳川を過ぎ渡邊に宿せり、船頭等私語して言ふには、今夜僧を劫して金を取うと、文覺上人竊に是れを聞き、知らざるふりして居たり、暫くして文覺念珠を捻り、祈て曰

く神護寺造營の用金百兩、五條天神の華表の下に埋め置けり、我再び上洛する迄諸佛守護ある様にと祈れり、船頭等はを聞き、大いに喜び、急ぎ京に上り、華表の下を掘る事五六尺に及べども遂に金を得ずして還る。

●蘭丸の頓智

織田信長或時諸大名を集め物語りして居たる時、信長は小姓蘭丸を呼で、あれなる屏風の繪の七賢人が先程より何やら咄す様なり、聞いて來れと申付けたり、蘭丸畏て屏風の側に暫時耳を付け、立ち戻

りて申すには、あれへ参り候へば君の御噂を申候が、拙者が参り候へば彼の者等だまり候と言へり、此時信長一言もなく他の大小名迄も皆其頓才に驚けり。

●日暮の里

加賀の大名、前田齋安死せし時、墓地は日暮の里なり、葬式大いに手間取れり、某公戯れに、(葬式は兎角く遅く齋安し)と云へば、傍にあり某公直に(覺悟の前田日暮しの里)とやつたそうだ。

●風流の頓智

昔平家の勢ひ盛なりし時、薩摩守忠度如

何なる宿世にや、内裏女房と深くも契ぎ

りける通路も繁けるが、或夏の夜常の如く忠度は夕方より、彼の女房が許へ忍び行きけるに、折柄一院ましますにも心付かず、忠度は扇を使ひて要のキリ／＼と鳴りければ、一院不審にぞ思はれける氣色の見へしにぞ、彼の女房は扱てはと心得ての。も。せ。と。謂。し。に。ぞ。音。や。み。ぬ。是。れ。は。源氏の夕貌の卷に、

かしかまし、野もせにすだく、虫の音よ、

我だに物は、いはでこそたもへ

とある意の取りし者なり、是れ風流の頓

智なり。

●花川戸縁のかけ橋

昔江戸花川戸の渡しに吾妻橋架り居りしに、相變らず船渡しを業となす者あり、其後公儀の役人船渡を禁止せしめんと議し居たるを或歌人之を聞きて、

吾妻橋、わがつまばしと、書くからに、

わたしやた前の、そばは離れぬ、

と詠みければ、役人は是れを聞き、何れも

大笑ひして其儘となりし。

●坂東家橋の逸話

坂東家橋は俳優中の呑氣者にて、米の價



は更なり、金銭勘定さへもろく／＼知らず、只藝道一心に勵み居たり、家桶の氣質金錢を視る事塵芥の如く、出方部屋を始め朋輩に至る迄奢りやる事日々なりければ、同優の部屋には常に用もなき客まで詰込む騒きなりし、或日家桶は舞臺より歸れば、常の如く既に數十人の客待ち合せたれば、今日は何か奢るべし、とて一杯五錢もするような天ぶら蕎麥百個を注文せり、客歸りし跡にて家桶懷中より壹圓札一枚を取出し、部屋の者に向ひて是で蕎麥代を拂つてくれ、釣錢はた前に

やるとて平然たりしと。

十四

#### ●女房の頓智

或る家に女房のみ居たり、一夜盗人數人入り來り、主人在らぬを幸ひ、家婦を取り巻きて金を出せと云ふ、女房オヤ今晚主人は貴君等と一つ連れでは御座いませんでしたか、賊舌を鼓し、エ、仲間であつたか、女房それでは飯でも焚きますかられた待ちなさい、賊デハ仲間ならよばれて行こうか、と舌をならして喰ひ居たり女房竊かに隣人を走らせて警察に訴へしむ、警官直に來り悉く捕縛せりと云ふ。

#### ●道中旅時雨

夕暮の鐘は上野か淺野の邸を抜けて、東西の綾目も分らぬ眞のやみ、心ばかりは暮れども戀路の闇に踏み迷ひ、落ち行く先は何處とも判らぬ者は人の身と我身の upper を啣ち泣き、涙の雨に濡れ増る、二人がしめつしめられつ、相々傘の嬉しさも宿世のゑにし淺草橋、二人並んで日本橋死に行く身は昨日とも亦京橋や、新橋で瀛車に乗るにも金はなく、朝の待合夕の茶屋、使ひ果して五拾錢、残る金故大事の武夫さん、こんな身にさしたも皆私故

さぞや御腹が立ちましょが、耐わてやいのと泣き添へば、男も目をば芝浦の、煙を跡に二人とも、所詮一所に品川や、よこした文の神奈川を、過ればやがて東雲の、ほの／＼曙けて横濱の、野毛のた山に立つ煙り、思はぬ方に靡くなり、男は女をいたわりて、これ照吉、是れ迄慣れぬかちはだし、嘸勞れたであらうな、二町程行けば松原の小影に茶屋がある程に、辛くも其處迄辛抱しや、ア、私しのやうな甲斐性のない者に、かゝりあい、都の中にも生まれぬ仕義になり、サゾヤ

十五

不甲斐ないと思ふであらう、義理につきあふたまへが心、思へば不憫でならぬわいのう、是れも前世の約束事と諦めて、必ず悪しう思ひやるなどたつしやります私と御前の仲は昨日や今日の事かいな―私が芝の五月亭で初めて掛つた其晩から雨の降る日も雪の夜も、通ふて御座る、そなたの心、淨氣な商賣はして居れど、何で仇に思ひましよう、デレた書生やヤボな客が何の彼のと忌らしい好かない事を言ひよれど、心の根じめ堅糸の、私も貴方の親實に心の糸を切つたわいな―

何日ぞや待合春本で逢ふて嬉しい首尾を見てから、夢中になつてとりつめ、夫れからといふ者は、朋輩には指さつれ、客は減る、私ひとりには厭はねど、貴方も國からの學費はこず、借金のみ殖え、到頭二人が身の詰り、此のやうにさしたも皆な私から、何んで貴方を疎ましよう、小田原には私しの叔母さんが居てなれば兎も角其處まで辿つて、其上死のうとも生きようとも、二人の末を極めましよう死のうとも生きようとも、た前と一所に私は是れ程思ふて居るに、忌であらうの

何のと、アダあほらしい、あてこすり聞えぬわいなと縄りつき、聲を惜まず泣き居たる、男も心取直し、日も長けたりイザ急かん、照吉たじやと急けばやがて程ヶ谷や、程なく戸塚の町過ぎて、涙は袖に小ゆるぎの、大磯小磯打通り、野面に出づれば里の童が雀追ひ、吹す鳴子や案山子、立つ小田原にぞ着きにけり、此様な道行をした者は東京に居る學生と娘義太夫にあつたそな。



落語

●名案

田舎者らしき老爺族人宿を叩き、今日夕方私の様な着物を着て、私の様な福々した顔で金持らしい人は止宿りませなんだかと、三軒も四軒も聞いて歩いたが少しも心當りが無い、丁度五軒目の家で、下女出で來り、へい先程貴下の様な南瓜二つと云ふ程よく似合た人が御止りでした、用事があると仰つて出て行かれたがまだ御歸りになりません、御用があまりますれば御待ち下さい、もう程なく御歸りになりましたよう、老爺ヤン／＼實は私じ

やがて前の家を見忘れて何軒か聞いて歩  
行したのだ。

● ない者のなしや

### 萬古着大安賣

御好み次第無い者はなし

右の様な大看板が出してあるから、一人  
の意地悪そうな男がつか／＼と這入つて  
番頭に向ひた前さんの店にはどんな者で  
もありませんかいと尋ねると、番頭へい  
どんな者でも古着ならば、ない者は御座  
りませぬ、男「そんなら紋付のコロモは

ありますか」番「へいそれは御座りませ  
ぬ」男「デハ一八のカヤはあるか」番  
へい其様な細長い蚊帳は聞た事もありま  
せん」男「綿入のフンドシはないか」番  
「承るのが始めて、御座ります」男「デ  
ハ三角のフトンは」番「御座りません」  
男「裕の綿入は」番「そんな者は見た事  
ありません」男「單物のドテラはないか  
な」番「有りません」男「さしこの振袖  
はどうじやな」番「御氣の毒様御座りま  
せぬ」男「あんな看板を出して置きなが  
らなんにもない店じやな」と云ふと」番

頭澄した顔して、夫れ故どんな者でも、  
ない者は御座りませぬと申上げたではあ  
りませぬか。



### 珍談

● 本年も相變らず

世の中が進歩致しますと便利な道具も隨  
分殖へて参ります、茲に近頃評判になり  
ました新蓄音機を玄關先へ据へ置きまし  
て年始受をしたと申す御嚙を一寸致しま  
す。

門禮者もいゝがどうもたじぎの長い馬鹿

叮嚀の奴だの、酔客だの、飲み倒しなど  
に遣つて來られては實に閉口するから、  
今年の新蓄音機で追ひ歸して仕舞う、先  
づ此邊へ斯ふ据へ付けて置いて、何とか  
斷り書きを出して置かんければならん、  
ヨシ／＼「多忙に付略儀ながら蓄音機を  
以て御答禮申上候」コレデヨシ／＼、何  
んな工合か一ツ試験して見よう、と機械  
を掛けますると、頓て蓄音機が發音を初  
めました、「コレハ／＼た早ばやと難有存  
じます、當年も相變らずに願ひ申ます」  
旨い／＼、至極妙々………チャ誰か最早

やつて来たぞ、それ〜一番蔭で聞いて  
やろうと奥へ這入り込んで、耳を澄して  
居りますと、門禮者か参りまして、「御免  
なさい、へい御慶を申上ます、舊年中は  
御厚情を受けまして有りがどう存じます  
猶本年も相變りませす」蓄音機「是れは  
〜た早ばやと有りがどう存じます、當  
年も相變らず御願ひ申します」左様なら  
ごいつて賀客は歸つて行きましたので、  
蔭で聞いて居た主人が、是れなら妙々、  
一々出るに及ばぬわい、と奥へ引込んで  
仕舞いますと、頓て又一人戸外へ参りま

やと難有存じます「查公」オヤ〜年始じ  
やない、戸籍に變りわないかと尋ねたの  
じや「蓄音機」當年も相變りませす「查公」  
ハア左様か、相變らぬと申すのか」を行  
つて仕舞ひ升と、其次に参りましたのは  
乞食で御座ります、「へい何卒ぞ御手元は  
御面倒ながら、少し許り頂かして下さい」  
蓄音機「是れは〜御早〜とありがと  
う存じます當年も相變りませす御願ひ申  
ます」乞食へんな顔して「へい御願いで御  
座ります少し頂して下さい」蓄音機「是れ  
は〜御早ばや」と何遍も〜繰返して

して、「御免なさい少々物を御尋ね申ま  
す」蓄音機「是れは〜御早ばやと有り  
がどう存じます」「イヤ年始では御座り  
まん少々御聞き申したいので」蓄音機「當  
年も相變りませす」「イエ一寸物を御尋  
ね申すので」蓄音機「是れは御早〜と」  
エ、馬鹿らしい物を聞きたいと云ふのに  
年始の挨拶計りして居るが、大方つんぼ  
なんだろうから、隣で聞かうと立ち去り  
ますと、入り違ひにやつて来たのは戸籍  
調べの巡查で御座います、「オイ別に變り  
は無いかのう」蓄音機「是れは〜御早ば

居りますので、乞食も變挺な顔して立ち  
去りました、暫くして其後へやつて参り  
ましたのは棺箱屋で御座ります、「へい御  
目出度う御座ります、昨年中は色々御厚  
情を蒙りまして、本年も相變りませす」  
蓄音機「是れは〜御早ばやと難有存じ  
ます」と雙方工合克く祝儀が濟みました  
が、棺箱屋は更に語をついで、舊臘は御  
當家の御嬢様もとんだ事で御座いまして  
誠にはや御愁傷の程御察し申し上げます、  
其節は御葬儀の品々御用向を仰付け下さ  
りまして難有御禮申上ますと申ますと

蓄音機は相も變りませず、御願ひ申ます  
と申して居りました。

●三題ばなし

火事、芝居の賊、酒

芝居好きの男半鐘の音を聞いて眼を覺し  
斯る時には好の道とて、枕を取てギツク  
リと見へ「今打つた半鐘は陽に發して陰  
に籠り、ジャン／＼二つの數を増し、三  
つとなつて摺り出したり、扱ては間もな  
き近い火事、ハテ何者の所爲よな……」  
モシお前さん／＼こわいら處ではありま  
せんよ、大變でん、「コラ騒くな女房」

獨でぐび／＼と飲み乍ら、「チエありがた  
い、まんまと首尾よく消防が行き届き、  
叩つ消したる火事卵水せへありや大丈夫  
だ、とグツと飲み、「大願上酒」何んです  
とへ、「片附ねへッ」。

●内 國 電 報

●源九郎氏一行無事通過セリ(安宅關發)

●大石良雄氏只今上京ス(赤穂發)

●日連上人布教ノ爲メ渡清ス(神戸發)

●外 國 電 報

●獨逸のピチン氏は肱鐵砲を以て、佛國  
のスケベイ伯と決闘せり(倫敦發)

睨みつけ寢衣の儘でヨイシヨイシヨと  
表へ出ると、表は大混雜「何處だ／＼」  
「横町だ」「モウ消へた／＼」「ボヤダボ  
ヤダ」と聞いて其男は悠々と家へ入り  
鐘はやみ、烟りは消る世の中に  
何とて人は、かけるなるらん。

女房悦べ、しらせはたやめになつたはや  
い「何ですて、よう呆れ返るよ、火事は  
何處です」「消へたわやい」「消へました  
かいア、嬉しい」「籠棒奴、嬉しう御座  
んすわいのうと云へ」「ドレ／＼祝ひに  
杯と、臺所へ行き、樽の呑口をひねつて

アメリカ國コンベイ黨總理ビスケット氏  
當撰セリ(オカシヤー發)



●佐野伯の犢鼻褌

佛國巴里に萬物大博覽會の開設ありし時  
佐野伯は我國の出品の事務官長として趣  
き、一ホテルに泊す、伯は身に洋服を着  
くるも腰には六尺の犢鼻褌を廻らせり、  
褌は伯に追隨して赤道直下を航し、紅海  
地中海を渡り、更に大陸を横ぎりて巴里

に入る、其間數旬日、跨間に潜伏して異臭を放つ、而も斯の如き物體であるから他邦の人を雇つて洗濯するもきまり悪く或る日伯浴室に入りて、浴に人なきを幸ひとし、手づから之を洗ひに掛る、時にポイ來りて室に入る、伯倉皇之を隠さうとしたが、早くもポイに發見され、ポイ又倉皇として出言するも言語通せず、ポイ手を延ばして之を奪ひ踵を廻らして局外に行きぬ、伯以謂らく身日本帝國の一官長として此に至り、犢鼻褌を取りて浴室にて洗ぐ、是れ一身の不名譽

のみならず、併せて國家の體面を汚す憾あり、常民畢生の失錯之に過ぐるはなしと憂色面に溢る、既にして數日後前のポイ一函を捧げて恭しく伯の前に來る、伯蓋を披きて見れば、前奪われたる所の犢鼻褌を清潔淨洗し、之れに塗るにスターチを以てし、之を延すに熨斗を以てし尙且蠟にて光澤をつけ、三折して之を納めてある、是に於て伯も覺り、前日ポイの奪いしは遠來の貴賓當地の事情に通せず、此不便を爲すと思ひしならん、而もポイも亦此布片の何たる辨せず、故

に斯の如くなりし者、伯始めて相互の誤解を知り、數日の愁眉を一朝に開かれたそうだ。

●南畝翁の逸事

ある年の正年廿五日の日暮頃、翁龜井戸天神へ參詣し、例に依り鶯をうる商人の店を尋ねた處、此日は朝より參詣の人群集し、晝頃には最早鶯は皆賣り盡し、皆其店を仕舞たる程にて僅かに一軒今店を取り居る處であつた、翁試みに此店の主人に向ひ、鶯はなきやと問はれた、すると主人答へて最早賣り切れて残りなしと

云ふ、翁之を聞いて腰なる墨斗を取出し懷紙を取出し、鶯の圖をかき、其の傍らへ

この神の眞の道のあらはれて。

うそは賣り切れ申候 蜀山人

●蜂須賀御庭の松

蜂須賀侯爵は夙に世故に通ずる以て自ら負へり、侯家事大小となく自ら之を指揮し、嘗て家従に委せず三田の崇邸を數十萬圓にて建て家従一齋駝に命じて巨松を運ばしめられた、其價七拾圓と稱す、侯一看斥けて曰く、斯の如き没趣の俗松奈

何ぞ乃公の撰に當らんや、且六七拾圓位にて嘉木を得るは甚だ難し、自ら目白の長太郎の園に行きて買はんのみと、藥院奇智あり直に其松を長太郎に托し、豫め配置して美觀を装せしめ、近日候來りて松を見らる、汝此松を嘆美し。候價を問はれたら百圓と云へ候必ず買はるべし、買はれたら汝にも禮を致すべし、次日候馬車を駕し目白に至る、園主迎へて前松を指し、是れ數百外の者にて中々得難者に候と云ふ、候シガーを喫しながら、園主に云はれるには此松乃公の意に適せり

價は幾何ぞと、園主掌を撫しながら幸に主公の恩徴を蒙らば小人敢て其價を貪らず百圓にて命に應ずべし、候莞爾として曰く、百圓可なりと即座に買求め、更に若干の挽賃を費し、三田の邸に輓しむ、園主侯の歸るを見て矢張り殿様は殿様だと藥院を呼びて之を告げ相對して大笑ひしたそうだ。

● 吝嗇家の智慧競べ

甲なる客人あり、或夜乙なる客人を訪ふ乙火を點せず暗室にて談話す、談終り甲歸らんとする時、乙マッチを摺りて履物

を見せたり、或夜又乙なる客人、甲の家にお遊ぶ、矢張り點火せず、歸らんとする時、甲の客人前日に酬ひんと握り拳にて乙の額を打つ乙大いに怒る、甲ぬからずマッチを摺るも無益なり、今君の額を打ちしは眼より出でたる火にて履物を檢せよと思ふ意なり、乙詞なくして退く、今度甲來らば是れに酬んど心掛く、或夜甲又來り將に歸らんとす、乙之れを門口まで送る、甲の曰く今日履物をはくは不經濟と思ひ、素足にて來れり、火を出すは御無用なりと辞す、甲歸りし後座敷を

見れば果して泥足の跡だらけ。

● 淺野侯が二錢の紙幣

淺野侯は關西の大諸侯なり、未だ嘗て金を手にして市に出でし事なし、一日散歩に出で或る者を買ひ價を聞いて壹圓紙幣を出しければ賣人餘錢として貳錢銅貨數個を侯に捧げたり、侯是れを見て乃ち曰く銅貨は重く嵩張るから、なるべく貳錢の紙幣にて勘定せよと、賣人侯の面を熱視し、莞爾として曰く、貳錢の札は御座りません。



### 失題

ハイカラ息子が情人に遣うとした簪を井戸の中へ落したので、た鍋や井戸の中の簪を拾ってくれたら壹圓やる、と云ふと親父が聞いてイヤたれが取てやる。或る奥様が用事に出ると、乞食が少し下さい、奥様後方をふり向きながら、私は途中で何にも遣らない事に決めて居るのだ、乞食懐中から手帳と鉛筆とを出してハア左様ですか、では御宅は何處で御

座いますか。旅へ出た男或時墓口を拾へり、中を見れば拾銭銀貨一箇入り居れり、夫れを見て田舎は田舎だ、東京で拾たら壹圓位は這入て居ろうに。

息子を東京へ修業にやつて置けば金を無駄に費つて困るから、たれのやうにしまつをして金を溜めると、手紙で意見をしておてやろう、と長々しき手紙を書いて袋に入れて、壹錢切手を貼用すると、傍から女房がもし良人、それでは不足税になりますと注意すると、亭主ぬからぬ顔し

て分て居るよ、此位に儉約しろと教へるのだ。

盲者メクラと啞者オシと蹠者イザリ三人同じ家に住めり、或日其隣家より火事起りたり、尋常の人にてすら驚くべきに三人の不具者は少しも驚がず、盲者は杖をつきて先に立ち啞者は其跡につき、蹠者は啞者の肩に乗り盲者の進むべき方向を教へたり、斯くして三人は安々と立退きたり。

御前の様な親泣かせはない、今に見ろ汝の子が又其通り御前を困らせるから、因果應報と云てな恐しいもんだ、と云ふて

聞かせられた悴は、た父様夫れぢや貴殿も若い時、親を泣かせたと見へますね。

娘や御前も最う年頃ぢやによつて、早く良人を定めんければならぬ、然し當世の若い者は兎角輕薄でいかねから、年を取つた學識も經驗もある人を極めるがよい就ては此頃年は五十だが、極氣質のよい紳士があるがどうだ、行く氣はないか、娘は耻しそうに答へて、たとつさん、妾は五十になる亭主を持つより、二十五になる良人を二人持ちたう御座ります。乞食が自分の子に向ひ、手前の様にそん



なに怠けて許り居て大人になつたら何になる積りだと尋ねた。

皆んなが金を出し合ひして何か食べやうじやないか、と一人が云ふと、他の人がそれでは大食の者と小食の者とあつていけないから、此中で一番の色男が奢る事にしたらどうだ、と云ふ、皆が夫れは面白いと賛成すると、隅の方に居た一人が頭を掻いて、そんな約束をされると我輩は迷惑だと。



綿貫のわの字を取れば狸にて

小袖もばけて袷とぞなる。

禍も三年あまり古壁の

鼠穴よりにはう梅が香。

天の原月すむ秋を真二つに

振り分け見れば丁度萬年。

限りなき君が齡や羨やまん

鶴は千年龜は萬年。

我門に糸繰る柳とく茂れ

花ぬす人のとり繩にせん。

御殿山高麗芝の青壘

花のふすまを引き霞かな。

嘶なと人に咄せば其人が

嘶すなゝぞと嘶す世の中。

後悔を先にたゝせてあとから見れば

杖をついたりころんだり。

悪くとも善くとも誰か言ひ果てん

時々變る人のこゝろは。

是はさて世は逆様になりにつけり

乗つた人より馬が丸顔。

あらためて孝を盡すも不孝なり

大事の父母の膽やつぶさん。

げに酒は憂ひを拂ふ玉帚

はいては塵にまざるきたなさ。

ほごゝぎす自由自在に聞く里は

酒屋へ三里豆腐屋へ二里。

春の夢はあんの如くに霞みつつ

月のかげさへたぼろまんぢう。

くひたらぬ噂も聞かず唐大和

たつた一つの餅の月影

吉野山去年の朶を見違へて

うろつく程の花盛かな。

奥方の留主をねらひて摘み喰

しては旦那につまみ喰はれつ。

海士乙女あらはな裸躰姿

にもたのが鮑は包み隠して。

言葉さね得云はぬ君の面影を

見る度毎に戀勝りけり。

眞心をこめてたこせし面影は

只一言のなきぞ悲しき。

三味線の習ひはじめに似た投書

ポツン〜(没々)となるぞ悲しき。

獨り猶こがれ居よとや舟底の

枕に残る妹が移り香。

懷中の冷たくなるも道理かな

雪を欺く肌にくれては。

磨墨の駒いざすゝめ貴社のため

筆の命毛よしつくるまで。

金玉の俳句口より出ぬとも

入れてみたきは指輪なりけり。

美しき心のふしは竹籠の

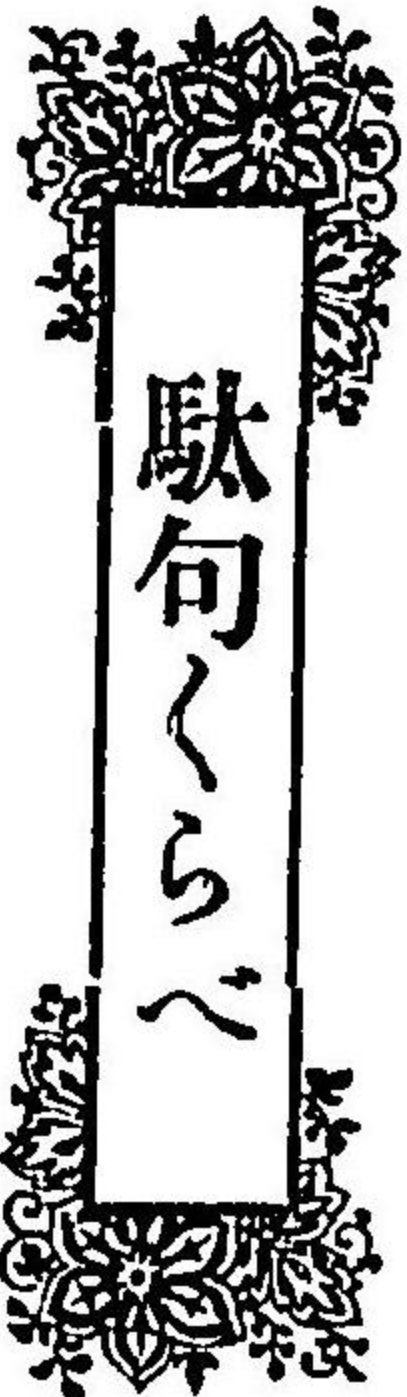
花よりも猶世に匂ひけり。

入相の鐘の音ごんとなりしより

よの間とき〜つかれけるかな。

たとへ身は西や東と隔つとも

ふみなたこせや音信なせん。



ほととぎす消ゆくかたに島一ツ

島一ツ沖に漁火二ツ三ツ

二ツ三ツ鴉の海邊に歸る雁

歸る雁悲しき夜なり小夜砧

小夜砧きゝつゝいねん秋の雨

秋の雨下戸も白酒こゝろみぬ

試みぬ花の仕合や奥女中

奥女中太平の世や貝合せ

貝合せ話のそれぬ須磨の月

須磨の月多情多恨の思ひ哉

思ひかな月見て雪の朝景色

朝げしき鼻緒に露の匂いけり

匂ひけりいつこともなき花の庭

花の庭床しき琴の調かな

調べかな鼓うつ夜の波の音

波の音梶を枕や夢想兵衛

夢想兵衛和想兵衛の夢心

夢心蝶とやならん春の雨

春の雨露立つ峰の一字

一字あとへすされは八文字

八文字踏むつまさきや蝶の飛ぶ

蝶の飛ぶ頃の寢覺や柏餅

柏餅楮は幟の勇しき

勇ましき賣聲早し初松魚

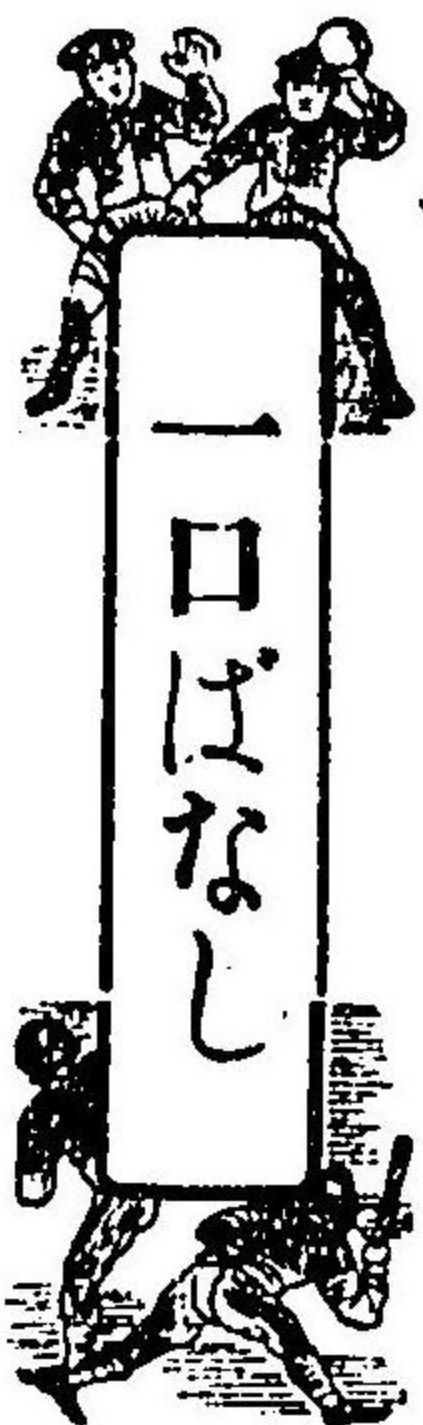
初松魚賣手買手の高問答。



### 狂句

松に啼くうぐひす歌をよむ藝妓  
みつ峰の巢を見てさどれ共和力  
寸膳にあかい酌魔が出て酔はせ  
義理で聞く淨るり恐れ入にけり  
落語家は人に笑はれうれしがり  
入ばなは藝妓出ばなはた客へ汲  
線香を焚いてた客は臍めかれ  
片隅にちひさくなりて居候  
隠居が又出て来たど人がいどう

わが顔を見ぬ日は隙な鏡とき  
積る胸炬燵でとかす雪の朝  
松かれたあと時ならぬ藤の花  
全盛の猫は樓主の白ねづみ  
借金をかるいた尻でかたをつけ  
慾の皮滿れば切れる智恵のかは  
鬼の留守まめを盗みの福の紙  
綻びる娘仕付きのわるい親  
寝て果報までと藝妓の親異見  
不衛生病ひは酒にアルコール  
酒不平皆しくじりの罪かぶり



●頭のはげる理由 甲、頭のはげる理由  
を知てますか 乙、知らない 甲、アレハ  
考へる時頭をかくから毛が抜けるのさ。  
●足を切る 甲僕は日露戦争の時露兵の  
足を切つてやつたよ、 乙ナゼ首を切ら  
なかつた 甲デモモウ首がなかつたから  
足を切つてやつたのさ。  
●づつと行く 旅人小兒に向ひ、此處か  
ら東京へは「づつと行けますか」小供ハ

イ「づつと行く人も休んで行く人もあり  
ます」

●馬鹿者揃ひ 弟、兄さん來年は一月と  
二月どちらが早く來るだろう、兄、來年  
の事が今から解る者か、父、是れを聞き  
兄は兄だけでエライ者だ。  
●田舎もん 足袋屋へ行き、足袋一足下  
さい、へい／＼九文ですか、十文ですか、  
なにに私は田舎もんだ。  
●足は八本 甲、章魚の足は八本だ子、  
乙鳥賊にも。  
●士官 甲、あの士官は大層月給を取る

だろウチー、乙、少將よ。

●此端書は晝届いたのか……………ハイタ便

●君學校の生徒が揃ってらア…體操

●君向ふから何んだか……………瀧車

●コラ其處へ上ッてはいかん……………塀

●スルメ 教師凡て物は熱に遇ふと膨脹

します、生徒でもスルメは焼と縮みます

●現金で買ふ た三やた前が今度拵へた

御正月の晴れ着はすつくり私と同じだチ

ー、下女ハイ同じですが、奥様私しは現

金で買ひました。

●理窟者と封書 理窟者「郵便局に至り

手紙を出して、是れは何程で参りますか」

局員「重量を量りて、是れは重いから、九

錢貼らねばなりません、理窟者「重い者

に餘計切手を貼れば、尙更重く成ましょ

う。

●記者と瀧車 甲「面白い本は誰が書く

のだらう、乙「是れは記者さ、甲「馬鹿

云ひ玉へ、瀧車がこんな事を書けるもの

かい、乙「記者が書かゝんで、誰が書く

のだ馬鹿め。

●腕白小僧 悪戯小供數名集まりてウラ

ナイ先生の障子を破りたり、先生大に

怒りて曰く、誰じやく、悪戯するのは、

兒童等冷笑して曰く、ウラナイ先生でも

解らぬのか。

●強盜に小切手 強盜、金満家に入り、

主人にピストルを差向け、「有り金悉皆出

せ拒むに於ては命がないぞ」主人「御氣

の毒だが家には現金は一文も置かないか

ら其代り小切手を渡すから、明日午前九

時頃に銀行へ取りにこい。

●盲人は好く見へる 甲「盲人は我々よ

り夜になると好く見へるな、乙「なせ」

甲「でも暗い夜に點燈なしで平氣に歩く

じやないか。

●大椀と臺灣 清國の乞食「日本に來り

門に立ち、小さき椀を出し、どうぞ少し

許りください、日本人「澤山やるから、

もつと大きな椀を出せ、言へば清國乞食」

でも大椀(臺灣)は日清戦争の時日本へ取

られましたから、ありません。

●六尺のトカゲ 田舎者、香具師に向ひ、

をれの村に六尺のトカゲが居るが、あれ

を取つて見せ者にしたらごうだ、香具師

は大いに悦び是れは一つ錢儲けが出来る

と、早速其男と田舎にゆき、六尺のトカゲ

の居るは何處です、田舎者、雨戸を外し日向ヒナタに出し、こゝが六尺の戸陰だ。

●頭から先 田舎者或る旅屋に宿り、足を洗ひて後頭を洗ふ、下女夫れを見て笑ふ、客、何を笑ふか、だつて泥足を洗つてから顔とは、客、ふん夫れなら、をまいは風呂入る時頭から入るかな。

●子供は正直な者 或人子供を連れ瀛車に乗らんとし、切符を買ふ時此子供は四才だから錢はいるまいと申して居りましたら、子供傍にありて、父さん私は六つですよ。

●一つなら只 御免なさい此柿はいくらです、三錢で四つです、はあそーすると二錢で三つ、一錢で二つ、だから一つは只ですねー、ちや一つ貰ひましょう。

●活動寫眞 甲乙二人活動寫眞で、源平時代の戦争を見て居りたら、甲あまりはつきり寫らんね、乙そーさ随分古い時代のことだからな。

●小僧と蓮 和尚「これ小僧頼んで置いた蓮は煮いたかな」小僧蓮の一片を出し、はい此通り虫が食つて穴が開いて居ますから、御上りにならないと思ひ、皆

な塵箱へ捨て、やりました。

●菓子一箱差上申候 先生病氣で學校を休みましたら、生徒から見舞の手紙を出しました、「承り候へば御病氣の由御見舞の驗迄に菓子一箱差上申候」と書いて出しましたが、一向菓子が参りません、後に先生は生徒に向ひ寄越さない者を、なぜ差上候と書くのですか、と尋ねたら「でも先生學校の作文はいつも、やらなくても差上候と書くじやありませんか。」

●一日は二十五時間 甲「君一日は何時間か知つて居るか」乙「知つて居ることも

内の母さんの話しでは此頃は一時間許り長くなりたと云ふから此頃は廿五時間さ。

●蒲團が付て居る 貧乏人あり、蒲團なき爲め藁の中に臥す、常に子供を戒めて云ふ、若し人が聞いても藁の中で臥と云ふなよ、或朝來客あり父面會す、其子供傍にありて、「父さんの頭に蒲團がついて居るは。」

●元が一番 甲「乙に向ひ、貴君は此度の試験に及第しましたか、乙「はい元の級です。」

●金太郎 父さん、桃太郎は桃の中から

生れたから桃太郎と云ふのですか、父をーだ、では坊は金太郎と云ふから金の中から生れたのですか。

●赤帽 近衛士官の子供「僕の父さんは赤い帽を被ぶて毎日隊に行くよ、連の子「家の父さんでも毎日赤帽を被ぶつて停車場へ行くよ。」

●蜜柑盗人 盗人、蜜柑の木に登りて盗む、主人見付て大いに叱る、盗人却て怒り失敬などを云ふな、今下に落ちて居たから付けに上つたのだ。

●七つ 隣の人「坊ちゃん、お正月が来るから八つになるのかへ、坊「真面目の顔して今年是不景氣だから、お正月をせんと母さん言ひましたから、矢張り七つです。」

●去年の暦 子「御母さん、暦が安かつたから來年のもと思ふて澤山買て來ました 母「おや未だ去年のが澤山残つて居るのにねー馬鹿な。」

●寝て居る時 子「父に向ひ太鼓を買ってください、父頭を振り乍ら、やかましいからいけない、子「では父さんが寝て居る時叩きますから。」

●城を持つ 父さん日本兵の手は余程大きいね、父なせか、でも「すてつせる」が城を開け渡した時に、旅順の城を受取つたじやありませんか。

●日と月 教師「生徒に向ひ、御前さんは月がよろしいか日がよろしいかと尋ねますと、生徒月の方がよろしいと云ふ、教師「なせですか、生徒」でも日は明るい晝を照すのですが、月は暗い夜を照しますから。」

●病氣が直る お醫者さん、なせあなたは走るので「でもぐすくして居ると、

病氣が直るといかにぬから。

●竹馬に乗て行く 坊や「御前そんなに針を粗末にすると死でから針の山に落ちますぞ、では母さん「坊は竹馬に乗て行きますは。」

●節儉 たい下女今坊が五厘銅貨を飲み込だから大變だ、早く醫者を招んでくれ、下女、夫れは考へ者ですぞ、五厘位で、醫者を呼ぶと一圓位取られますぞ。

●大は小を兼ねる 教師「大は小を兼ねる者じやから好く覺へて置きなさい」生徒「では長持は枕に出來ますか」

● 正直な下女 細君瀛車に乗らんとし不

圖氣がついて「あゝ信玄袋がない、お松や早く家へ行つて見てきてをくれ、瀛車の出るまでもう十分しかないから、はやくはやく、お松は狼狽て、家に歸り今一二分で瀛車の出ると云ふ時空手で戻り來り奥様今見て参りましたら、信玄袋は確に二階に御座りますよ。」

● 汁粉屋 甲乙二人汁粉屋に入り 甲「汁粉屋へ來るとまるで東京へでもいつたよーだな」 乙「馬鹿なことを云ふな、甲」でも手に持つ者は日本橋、口へ入れると神

田、急いで食へば下谷區じゃないか。  
● きつと謹みます 父「次郎お前は父の言ふ事を少しも聞かぬから、もう家に置かぬと申しますと」 次郎「帽子父様何卒御免を蝙蝠傘これからきつと謹みますと」 申しました。

● 茶の木 甲「裏の茶畑から毎晩狸が出るから困ります」 乙「うそを云ふな」 甲「では晩方にくたまへ見せてやるから」 乙「其晩こわく甲の云ふ茶畑へ行く」 甲「ちやの木が居るだろう」 乙「あゝちやの木く」

● 使ひ者 娘「お母さん、今貰つた手拭の地の悪いと豆でも洩れそーですせ」 母「そーかい、それなら又よそへ使い者にするさ」

● 神官と僧侶 神官「僧侶に向ひ一寸伺ひますが、一體十萬億土や極樂は何處にあるのですか、僧侶「眞面目顔にて、はいそれは貴殿御承知の高天原の隣です、神官一言もなし。」

● 新煙管 良吉「たまいの事を太吉が新煙管じやと云ふてをるせ、良吉、其筈さ、何んにつけてトゥリがヨイからだろうよ

なあに、そーじやないよ、ツマラナイ男だと云ふ事さ。

● 赤い顔 甲「酒を飲んだ人と、恥をかいた人とは如何程違ひますか」 乙「答へて曰く恥をかいた人は顔を赤くし、酒を飲んだ人は赤い顔します」

● 奇人 詩人「支那に何ぞ異人多き見玉へ、孔子はノ玉は食、孟子は岩食ふと云ふじやないか」 歌人「傍にあり我國にも其例少なからずだ、阿部仲磨を見玉へ」 三笠の山に出でし月カモウと言ふたじや無か  
● 金儲の新法 或る處に大慾者ありて日

夜金儲の方法を考ふ、遇ふ人毎に必ず良法を問ふ、或日智者來る、大慾者大悦びにて之を問ふ、智者余の金儲は恐らく天下に比類なし、先づ百圓を謝禮せば教ふべしと云ふ、大慾者大に悦び眞に百圓を出す、智者其百圓を懐中に入れて曰く、良法は他なし余は今一言を以て百圓を懐中にせり、君又斯の如くせられよ。

(向ふの粟売は小粟売か大粟売か)と五六扁續けて早く言ふて御らん。

●醫學博士 良吉「私が昨日の晝御飯を食べてから、いくら食べてもく御腹が、

又居眼す、生徒之を見て大に笑ひ「先生又我等の不品行を嘆せらる皆克く勉強すべし」と教場却て肅然たり。

●牛盜賊 泥棒あり、牛を盗みて訴へらる、判事曰く、「汝は牛を盗みしに相違なし、尋常に申せ」盜人兩袖を振りながら「此通り持つて居りません、御疑ならば裸躰になりましょうか。」

●城をまくら 甲「昔の人は如何して彼のように頭が大きいだろう」乙「何故か」甲「でも城を枕にして討死した人があるではないか。」

すきて堪りませんから一寸診察を願ひます」醫士「其時何を食べましたか」良吉「運根」それでは見るに及ばない、御飯が皆な運根の穴に入つてしまつたのだ。

●豚尾 田舎者、横濱見物にゆき、支那人を見て驚き、横濱には色々の人が居るとは聞いていたが頭に尾の生へた人は初めてだ。

●大先生 教師授業時間中教場にて居眠りす、生徒指目して互に笑ふ、教師俄に眼を開き、余は今汝等の怠惰なるを嘆息し、目を閉ぢて考へ居りしなりと、暫くして

●近眼 甲「君は近眼だから、遠き所の者は見へまいね」近眼「そんな事はないな、太陽でも月でも見へるからな」

●汗は皆私へ参りました なつあつき日主人小僧をして團扇にて煽がしむ、暫時にして「やれく、これで涼くなつた、汗も何處かへ行つてしまつた」小僧ぬからず「旦那の汗は皆私へ参りました」

●臆病 甲「君の顔色は悪いね」乙「持病が起たからだ」甲「じゃ萬病丸でも飲み玉へ」乙「其位では逆も療らないよ」甲「如何して」乙「でも僕の病氣は臆病



だからな」

●啞者の白狀 啞の乞食碗を持ちて軒に立てり、婦人將に食を與へんとする時、小兒馳せ來り「彼は偽啞なり、物を與ふるに及はずと云ふ」乞食大いに怒り前後を忘れ大きな聲を上げて「我は眞の啞だぞ」

●一割引 甲「一割引とは何の事だ」乙「それは一圓の者を買ふと十錢引く事だ」

甲「そんなら十錢の者を買つたらタッカ。

●太陽の朝寢 子供「父ちゃん、寒くなるよ、なせ日が短いのです」父「そりや寒

時には出ないからさ。

●天保錢と銅貨 天保錢、銅貨の家に行き、世の不通用物となりたるを嘆す。銅貨暫く考へて、忽ち手を打ち高聲に吟じて曰く「天保錢を空しうする勿れ後に繁榮なきにしも非ず」

●牛 父「これ坊よ、其様に飯を食べて直に寝ると、牛になるぞね」子「之を聞き直に起き直り、坊が牛になつたら、父さん、親牛ですわね。」

●前景氣 甲「博覽會の前景氣を見て來たが、何うもすばらしい者だな」乙「

いから太陽も早く寢て遅く起きるからさ

●月日の大小 生徒「月は日よりも眼に見へる通り大きいんですね」先生「いね日の方が餘程大きいのです」生徒「でも日が三十も集まつて月になるのでしよう

●活版屋のたやじ 活版屋の主人「凡て印刷物は澤山刷れば刷る程安くなります客「では何れだけ刷つたら無代で出來ますか。

●太陽は張子 甲「太陽は屹度張子だせ」乙「そんな事があるものか、あれは火焰の固りさ」甲「いや張子の証據には雨天の

僕は前ばかりじやない、後の景氣も見て來たぞ。

●二度目から 病人「醫者に向ひ、此の藥は苦ニガくありませんか、醫者「初めは少し苦がいとも知れませんが、二度目からは大變飲み好くなります、病人「では先生私は二度目から載く事に致します。

●谷間の花 或る人鼻の低い頬の高い娘を評して曰く、「彼の女は谷間の花だ」傍なる人怪みて其故を問ふ、でも「兩頬」兩峰トウボウ）が高く花ハナ（鼻）が低いから、谷間の花さ

●大風 甲「昨夜は非常な大風でしたな

一、乙「さようさ非常な大風でした、隣の石臼が吹き飛んで来て、我家の蜘蛛の巣に掛つて、居りますからな。」

●あついで氷 母「今朝は餘程寒いと思つたら、其筈な事河にはあついで氷が張つて居る者」子供「傍にありて」母さん、うそ許り言いなさんな少しもアツクないよ、皆んなツメタイ氷許りです。」

●地は物を食ふ 子供「父さん地べたは物を食ふよ」父「そんな馬鹿な事がある者か」子供「でも坊の下駄の齒が食はれたと見えなくなりました。」

●阿彌陀様 親「御前は阿彌陀様を知つて居るかい」子供「知つて居ります、籤を引いて御菓子を買ふ事です」

●東郷大將は百姓 田舎者日比谷の公園に行き、東郷大將手植の月桂樹を見て、ひやー東郷さんは戦争が上手だが御百姓も上手だなー。

本館にて一度何百年後でも取揃廣告せる者は、**何百年**へ送るから廣告を見て思ひついた時買給へ。**割引**ヨリドリ六冊一圓十冊一圓五増のこと。十錢郵便切手なれば必ず一割

### 一人間 運勢便覽

定價十四錢 郵税二錢

人間一代の内には如何なる人にも其人の生れし年々に依り、運勢の吉き時と凶き年のある者であるから、運勢の好き時は何事を始めても大當りで商家や相場師は直に大福長者となり、月給取りは思はぬ成功をする者であるが、是れに反して運勢の凶い年は何事を始めても失敗許りして居る事は諸君御承知である。然るに運勢の向ひて居る年でありながら運勢の向ひ居る事を知らずして儲かる金を儲けぬと居る人や好き月給取りの口がありても考へて居る人が世間にはいくらかある、實に氣の毒な次第である、だから本書を著した譯であるから諸君も一冊御求めになり、何年は運が凶いから控目にせねばならぬ、何年は運が好いから活動せねばならぬと云ふ事を常に心懸けて居られたならば大成功、大富豪疑ひなし、望儘であるから諸君も常に座右にそなへ置



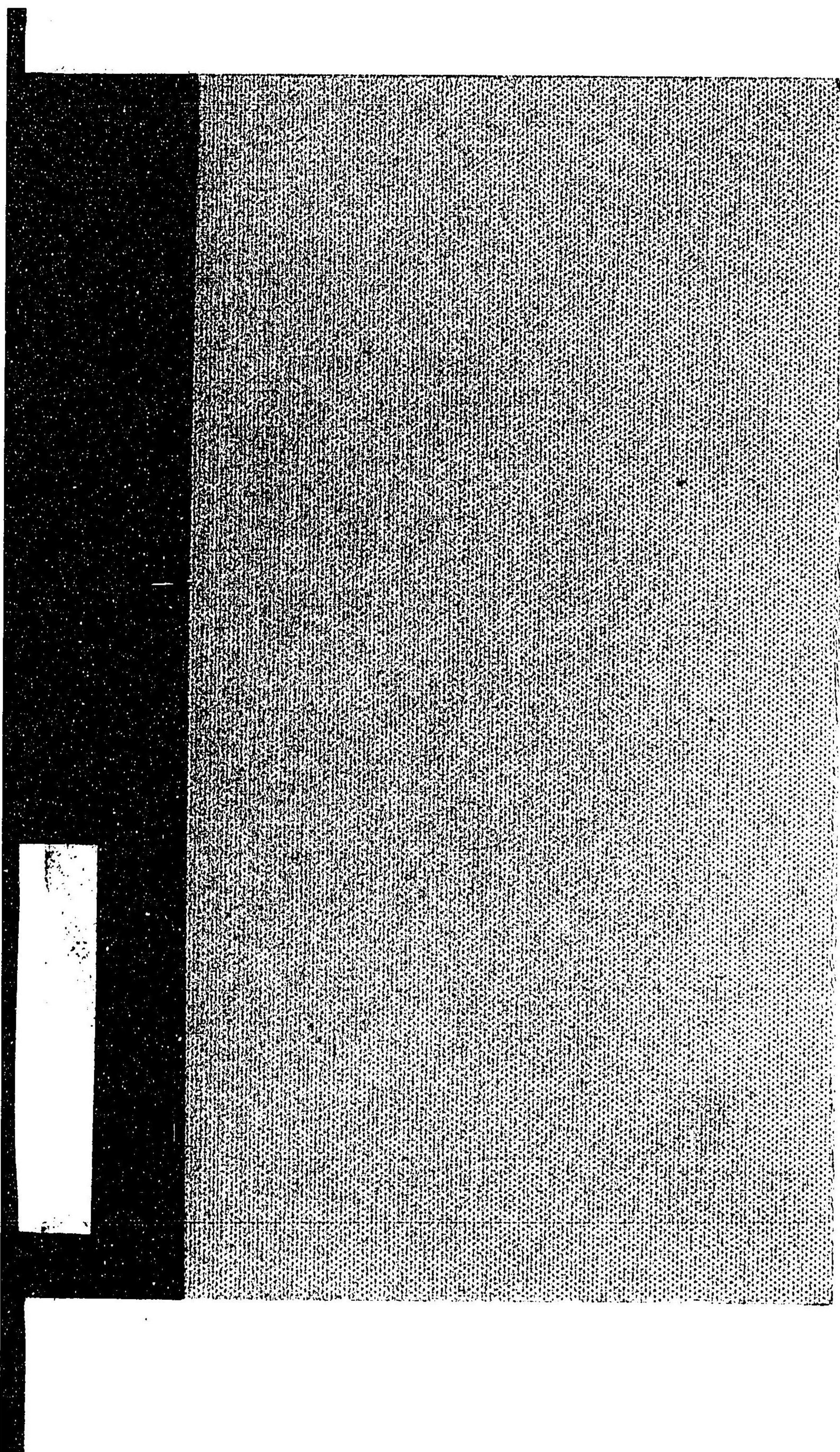
行所 三重縣桑名市大田 弘報館

明治四十三年五月廿八日印刷  
明治四十三年六月三日發行

著者 三重縣桑名郡桑名町大字大田七番屋敷 山田貞夫  
發行所 全縣全國四日市市新丁百九十八番屋敷 加藤幸延  
印刷者 同縣伊勢國四日市市新丁貳百卅四番屋敷 三重印刷所  
印刷所 電話百十七番

發賣所 弘報館  
三重縣桑名郡桑名町大字大田七番屋敷  
(振替貯金口座番號) 東京一六九二八番





特 50

41

一読  
千笑 滑稽頓智笑話

国立国会図書館

091701-000-1

特50-41

滑稽頓智笑話

弘報館

M43

DBO-0173

